

大人が絵本を 第7回 能動的な絵本、



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

○絵本はメディアのひとつです

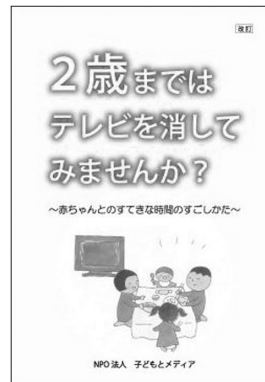
私たちビブリオキッズ司書の主たる業務は、育児支援です。来館されるお母様方には、「子どもの表情が乏しい」「まだハイハイしない」「初語が遅い」など、わが子の成長で気がかりなことが毎日の生活の中でウッスラと気づかれています。特に、発語の悩みは絵本と関わることで明確に表れ、読書相談の中でお母様方は悩みとして初めて具体的にお話しされます。

ここで、絵本というメディアの本質に近づいておきましょう。絵本と言葉の発達の相互関係は、言語リテラシー獲得理論としてCole(1996)によって提唱されています。絵本を学問的に解説することはさておき、絵本を読む目的として語彙や言葉の獲得、情操教育といった知識・学習が先行してしまうのでは、子どもたちの自由なココロとカラダがどこか削がれてしまうようではなりません。子どもたちにとって絵本は「楽しいもの」という大前提があって、そこに様々な付随効果を得られるのですから、子どもの成長に沿ってくれるこんなに影響力の大きなメディアツールは最大限に活用したいものです。

○赤ちゃんの言葉の発達とメディア

とはいうものの、発語の悩みの背景にテレビ・DVDなど映像メディアとの接触が見え隠れしていることは、いささか気になります。そこで否が応でも絵本をひとつのメディアとして学問的に捉えていかなければならない時代背景に気付くことがまずは重要なのです。

実生活上のいろいろな理由があるにしても、1歳前後の乳幼児でDVD視聴時間の長さを問題視しなければならない実態があります。テレビやDVDは視線がモニターに集中することで、親子で目を合わせる機会が奪われ、感情表



NPO法人 子どもとメディア発行小冊子
(左) 佐藤和夫、原陽一郎、佐伯美保 編集『2歳まではテレビを消してみませんか?』
(右) 乳児部会 編集『食事中はテレビを消してみませんか?』

現や大人とのやりとりが少なくなります。また画面上の模倣はあっても、人に合わせた模倣が乏しくなり、これらすべてが言葉の遅れの要因になると、茨城県立こども福祉医療センターの家島厚医師は、NPO法人子どもとメディアの小冊子「2歳まではテレビを消してみませんか?」で指摘しています²⁾。

○能動的な絵本、映像は受動的なのです!

絵本は、親または子ども自らが手に取り、読み手の言葉となって状況を展開させ、想像を膨らませて能動的に関わり共感を得るものです。絵を観察することで物語にない物語を創りだしたり、語られる言葉によって絵にさらに躍動感をもたらすこともでき、読む人と聴く人とが相互に共感して絆が生まれます。また、物語と対話したり、読み手の大人と会話したりしながら読むことは、受信と発信の双方向の活動を行って能動的経験を積み重ねているのです。この受信と発信こそが、コミュニケーション能力の基礎なの

手にするときは！ 映像は受動的なのです！

企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ（福岡市）

ですが、ではテレビやDVDなどの映像はどうでしょうか。これらはスイッチを入れるだけで、見ている者が何の働きをしなくても次々と変化する映像が届けられるので、ほとんど受動態勢でいられるのです。その映像が刺激的であればあるほど、映像は見ている人たちを受動態勢に押し込んでしまいます。

○脳の科学と絵本

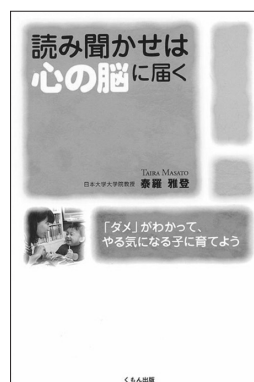
絵本・児童文学研究センターの工藤左千夫氏は、テレビを「流動刺激文化」と位置づけ、「流動性の媒体が受動的になることと比べて、読書は遊びと同じように脳が能動的に関わるため、その能動性が介在して前頭葉が刺激を受ける」³⁾と述べています。絵本を読むことで、モノの名前から動作語など言葉の刺激を受け続けていることになりま。さらに、社会性や感情に至るまで実生活ではできないことも体験でき、想像力を使って創造的に考えることで、脳は積極的に働くことになるのです。

もう一つの視点から、貴重な検証研究結果が報告されています。「歌い聞かせ・読み聞かせの構造と機能の発達」の研究プロジェクトチームは、「子どもの年齢段階に関わらず、母親が子どもを尊重した読み聞かせを行うことで、子どもが能動的になる」⁴⁾ことを示唆しています。つまり0歳児であっても、子どものペースを尊重することや子どもの立場での読み方をするすることで、能動的になることを示し、0歳児との読みあいが言語発達の基盤づくりをしていることを明かしています。自分で話せない乳児は気持ちを代弁してもらえることで、受け止められていると感じ、母親と一体でいることに安心して、ますます能動的に関わろうとしてくるのです。

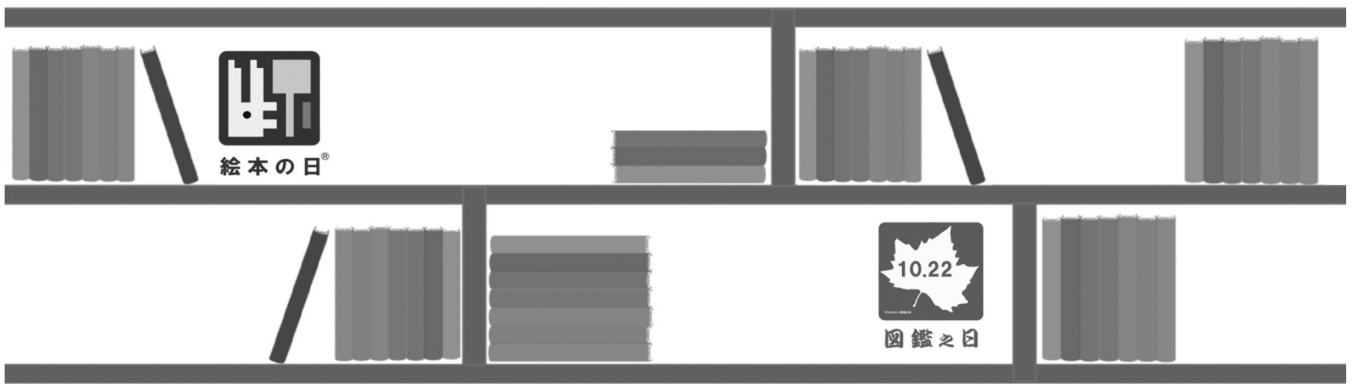
次に脳科学の見解をみてみましょう。仙台医療センター

小児科の田澤雄作医師は、「映像は視覚や本能の脳を刺激し興奮させるが、考える脳、想像する脳は動かない。過剰な映像への接触は、子どもの脳が人間の脳として発達することを障害する。子どもはお父さんお母さんの顔や眼を見て人間としての感性を学び、生の声を聞き口元をみて模倣する本能を駆使して言葉を獲得する」⁵⁾と言います。前頭葉には言葉を司る部位もありますから、前頭葉の機能障害は言葉にとっては死活問題なのです。さらに、認知神経科学を研究している泰羅雅登氏もまた、受動的な映像メディアからは言葉すら獲得できないことを、著書『読み聞かせは心の脳に届く』で解説しています⁶⁾。乳幼児がテレビやDVD等の映像メディアを長時間視聴することは、脳の発達・成長を阻害し、ひいては人間として成長することをも阻害する危険因子ということを科学的に理解できます。

乳幼児は感情表出や言葉など人間としての能力を、親とのふれ合いを通して最初に身に付けていきます。絵本を読みあうことは子どもにとって、身近な大人のぬくもりを感じながら「愛されていること」を確認できます。そして、絵本のお話を介することで、親子で共感しあう体験ができます。親にとっても、子どもとの感情共有は至福の時間な



泰羅雅登
『読み聞かせは心の脳に届く』
(くもん出版)



のです。「共感」することの大切さ、そしてその重要性を見出してもらうためにも、小児医療に従事する医師・歯科医を含むすべてのスタッフが医療の視点に軸足を置いた関わりを持つことが必要であります。

○2歳まではテレビ・DVDのない生活を！

お母様には育児疲れも生じるでしょうし、子どもに手を取られて家事の時間を捻出できないこともあるでしょう。そんなとき、手軽なDVD映像を流しておけば子どもが静かに見てくれるだろうという考えは日常的で回避できないのかもしれませんが。そこで、映像メディアによる子どもたちへの悪影響を避けるために、育児支援として私たち小児歯科医療の現場での正確な広報活動が必要と考えます。

日本小児科医会は2004年、「『子どもとメディア』の問

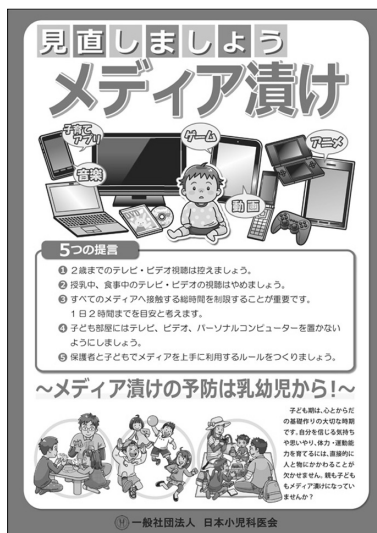
題に対する提言」⁷⁾を発表し、行動計画を提言して活動を展開しているところですが、乳幼児に携わる小児歯科医療の現場でも同じように啓発活動を率先して行うべきでしょう。同会発行の「スマホに子守をさせないで」や「見直しましょうメディア漬け」のポスターを大いに活用させてもらおうではありませんか。

2歳までのテレビ、ビデオ視聴は、対人関係や言葉の発達に悪影響を与えるものなのです²⁾。「映像メディアはバックグラウンドで流しているだけであっても、幼児用教材として意識的に使う場合であっても、2歳未満の乳幼児にとって悪影響を持つ可能性があり、よい影響は報告されていない」⁸⁾ことを心に留めて、ぜひとも「DVDを絵本に換える」活動を起こしましょう。

絵本はDVDのようにただ与えておけばよいものではありません。絵本を楽しむことができる子どもに育てるには、親の関わりや場合によっては根気強さが必要になることもあります。子どもにとって一番大切な乳幼児期の数年間で、お父様お母様も努力し、楽しみながら親と子の相互の成長に最良の方策をとって、この時期を乗り切ってほしいと思います。その苦労は後に大きな力を発揮し、喜びとなり財産となります。そのために小児歯科医療の現場で、育児支援としてできることはたくさんあります。

お母様が家事を行う間、ひとりで絵本を読むことが無理な乳幼児に対しては、音の出る絵本などをすすめることもあります。もちろん、おもちゃでもぬいぐるみでも良いのです。

映像メディアの使用を、ストーリー世界を能動的に楽しむ媒体である絵本に換えるだけで、脳は生き生きと活性化するのは、読めば読むだけ、絵本体験を増やすほどに、脳の活性化はさかんになるのです。そういうことをどれく



一般社団法人 日本小児科医会
「子どもとメディアの問題に対する提言ポスター」

E-mail

安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

連絡先 福岡市南区大橋3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272 URL <http://bibliokids.jp>



らの医療人が乳幼児をもつ保護者に伝えているでしょうか。こういった情報を知らないままに保護者が子どもに良かれと思い、知らず知らずのうちに悩みや問題を自らが生みだしているケースは多く潜んでいると思われます。特にテレビゲームやケータイが普及した社会で育った人たちが親となり、映像メディアの弊害に関する知識に乏しいまま育児に携わる時代に突入し、そして長い時間が経過しているのです。ちなみに、共著者の濱野は「子どもとメディア」研究会発足の発起人として当初から関わり、現在はNPO法人「子どもとメディア」の理事の立場で十数年活動を続けています。

○私たちが伝えたいこと

子どもに関わる医療従事者は、予防的役割を担うと覚悟

すべき時代なのです。小児医療、小児歯科医療に関わるすべての人々が映像メディアのもたらす影響について、医療現場だけでなく日常的に発信し続けていきたいものです。そして、小児医療文化に携わる私たちだからこそ、それと合わせて胎児・新生児期からの能動的な絵本の楽しみ方を、大きな声と一歩前に出た行動力で発信し続けていきましょう。

スマホから新しいメディア社会が展開される現状の中で、乳幼児期の発育に関する新たな問題点が生じています。私たち医療人は医療における予防の考え方を導入し、これに対処する術を広く社会に伝えるべきだと考えます。それが私たち医療人の育児支援のひとつとして活動できることなのです。

文 献

- 1) コール マイケル, 天野清 訳：文化心理学—発達・認知・活動への文化, 新曜社, 東京, 519, 2002
- 2) NPO法人 子どもとメディア：2歳まではテレビを消してみませんか？：子どもとメディア, 福岡, 8-9, 2014
- 3) 工藤左千夫：すてきな絵本にであえたら（絵本児童文学基礎講座Ⅰ）, 成文社, 東京, 18-23, 2004
- 4) 田島信元, 他：乳幼児の発達に及ぼす「歌い聞かせ・読み聞かせ」活動の構造と機能の発達—理論・仮説と検証, 生涯発達心理学研究, 2, p.132-156, 2010
- 5) 田澤雄作：乳幼児保育とテレビ, 周産期医学 36(S) : 938-941, 2006
- 6) 泰羅雅登：読み聞かせは心の脳に届く, 12-18, 0-35, 47-57, 2009
- 7) 社団法人日本小児科医会：「子どもとメディア」の問題に対する提言, 一般社団法人日本小児科医会, HP <http://jpa.jp>
- 8) America Academy of Pediatrics：Media Use by Children Younger Than 2 Years (米国小児科学会の提言), 愛育ねっと <http://www.aiikunet.jp>



一般社団法人 日本小児科医会
「子どもとメディアの問題に対する
提言ポスター」